赤井川村子ども読書活動推進計画

令和３年度（２０２１年度） ～ 令和７年度（２０２５）

赤井川村教育委員会

令和３年３月　　赤井川村教育委員会

目　　次

第１章　計画策定の基本的な考え方

１　策定の意義と目的　Ｐ１

２　計画の期間　１

３　計画の対象　１

４　赤井川村の現状　２

第２章　具体的な取り組み

１　幼少期における読書活動の推進　３

２　学校における読書活動の推進　４

３　村図書コーナーにおける読書活動の推進　５

４　関係機関との連携・協力による読書活動の推進　６

第１章　計画策定の基本的な考え方

１　策定の意義と目的

近年、インターネットやスマートフォンをはじめとする情報化社会の進展に伴い、子どもたちの情報機器保有率も高まり、子どもたちを取り巻く生活環境の変化や価値観の多様化などによる読書離れや活字離れが増加している。また、機器依存による身体への悪影響も問題視されてきている。

こうした状況の中、子どもが言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けて歩んでいく上で読書活動は欠かせないものである。自ら進んで本を読む子どもを育てていくことは、子どもたち自身の将来、ひいては社会の発展のために極めて重要なことと捉え、地域社会全体の問題として取り組んでいく必要がある。

赤井川村では、子ども読書活動の推進に向けて、村図書コーナーや学校図書館図書の充実や関係機関との連携、読み聞かせボランティアによる活動の支援等を行ってきた。本計画では、「平成２８年度～令和２年度」読書推進計画の反省と評価による事業の見直しや子どもたちの現状を再認識する中で、赤井川村の子どもたちがこれまで以上に自発的・積極的に読書活動に親しみ、生涯にわたる読書習慣を身につけることができるよう、地域や学校、教育委員会等が連携を強め読書環境の向上を図らなければならない。そのための指標として、「令和３年度～令和７年度読書推進計画」を策定する。

２　計画の期間

この計画の期間は、令和３年度から令和７年度までの５年間とし、必要に応じて計画の見直しを行う。

３　計画の対象

この計画は０歳からおおむね１８歳を対象とし、発達段階に応じて大きく４つの期間に分けて、各期における特徴を踏まえて読書活動を推進する。

（1）乳幼児期（０歳～６歳）　　「本に出会う」

３歳までに、自分の意志や欲求を徐々に言葉で表出できるようになるとともに、文字の存在を意識し絵本に興味を示すようになる。そのため、この時期は絵本や物語などに親しみ、保護者等の周りにいる大人からの語りかけが大切である。

４歳以上になると、日常生活に必要な言葉が分かるようになり、かな文字も全部

読めるようになる。この時期は絵本や物語を読んでもらうことなどにより、その内容を自分の経験と結びつけ、想像を巡らせるなどして、読書の楽しみを十分に味わうことが大切である。

(2)小学生期（６歳～１２歳）　　「本に親しむ」

低学年は読書習慣がつき始める時期であり、文字で表された場面や状況をイメージすることができるようになる。この時期は読み聞かせなどにより、いろいろな本に親しんだり読書を楽しんだりすることが大切である。

中学年は多くの本を読むことができるようになり、幅広いジャンルの本に親しみ、読書を通して必要な知識や情報を得るようにすることが大切である。

高学年は目的に合った本を読むようになり、日常的に読書に親しみ、読書を通して自分の考えを広げるようすることが大切である。

(3)中学生期（１２歳～１５歳）　「本から学ぶ」

中学生期は多くの本の中から自分に合った本を選択することができるようになり、共感・感動する本に出会うと、何度も読むようになる。この時期は、読書が自分の生き方や社会との関わり方を支えてくれることを実感することが大切である。

(4)高校生期（１５歳～１８歳）　「本と生きる」

高校生期は読書の目的や資料の種類に応じて、適切な読書技術によって読むことができるようになってくる。この時期は、自分の読書生活を振り返り、読書の幅を広げるとともに、読書習慣を身につけ、生涯にわたって読書に親しむようにすることが大切である。

4　赤井川村の現状

(1)村図書コーナーの現況

〇蔵書冊数　　6,９５９冊（令和２年度末）
　※内、「健康支援センター図書コーナー(子ども対象)」　およそ４５０冊
〇利用者数　　３６１人（令和２年度末）
　※内、「健康支援センター図書コーナー」　３９人
〇貸出冊数　　９２０冊（令和２年度末）
　※内、「健康支援センター図書コーナー」　８７冊

今年度、古い本を３６０冊ほど除籍（廃棄）したため蔵書冊数は減ったが、毎年、新刊や話題図書を中心におよそ３５０冊購入している。その内一割ほどの冊数を子

ども向け用図書として購入し、健康支援センター図書コーナーに置いている。

（2）学校図書館の現況

〇学校図書館蔵書冊数（令和２年度末）
- 赤井川小学校　　3,４６０冊
- 都小学校　　2,９４５冊
- 赤井川中学校　　5,９３３冊

〇学校図書館貸出冊数（令和２年度末）
- 赤井川小学校　　36．７冊
- 都小学校　　３１．９冊
- 赤井川中学校　　５．７冊

※数値は、児童・生徒一人あたり

第２章　具体的な取り組み

1　幼少期における読書活動の推進

①ブックスタート

乳幼児期の言葉と心を育むためには、乳幼児があたたかなぬくもりの中で、優しく語りかけてもらう時間が大切である。肌のぬくもりを感じ言葉と心を通わすかけがえのないひと時を、「絵本」を介してふれあう事業である。

一昨年度までは、本の購入に関わって、保健師から希望を聴取して教育委員会で購入していたが、実際の納入と事業の実施とのずれが大きいことから、今年度より事業の主体が保健福祉課に移管となった。

乳幼児期から親子で読書に親しむ習慣づくりの大切なスタートであることから、今後も保健師やブックボランティアと連携を図り、ブックスタート事業の支援に努めたい。

②保育所における読書活動の推進

幼児期に本に親しむことは、豊かな心を育む上でとても大切であり、保育所は幼児期に本に出会う貴重な場である。

保育所では保育士による絵本の読み聞かせが日常的に行われており、今後も関係機関と連携して、読書活動の大切さを保育士と共有していきたい。そのために、保育士との交流を今まで以上に図っていきたい。

③児童用図書（絵本等）

乳幼児から良い本に出会うことを目的に、村有図書購入に際して、あかちゃん絵本を含めて良質の絵本の購入に努めてきた。こうして購入した絵本等は、「こっこクラブ」や「ひよこの会」をはじめとする乳幼児や保護者が集まる機会が多い、健康支援センターに子供向け用図書コーナーを設置し貸出を行っている。

今後もブックボランティアや保護者、保育士などの意見を参考に児童用図書の充実を図るとともに、有効な活用が図られるよう（保育所への貸出など）ＰＲに力を入れていきたい。

2　学校における読書活動の推進

①学校図書館の環境整備

学校図書館は児童・生徒の自由な読書活動の場であり、学習に対する興味や関心を呼び起こすとともに、豊かな心を育む場でもある。しかし、現状、文部科学省が定める学校図書館図書基準の学校蔵書数に至っておらず、計画的な図書の充実を図る必要がある。蔵書不足を補う上では、村図書コーナーや健康支援センター子ども向け用図書コーナー、北海道立図書館の「学校図書館サポートブックス事業」等の一括貸出や学校間による貸出等の推進に努めたい。

また、学校図書館が魅力的な場となるよう、児童・生徒（委員会活動等）、教職員、ボランティ等が協力し、展示の工夫（POP 作成等）や図書の整理に努める必要がある。

②読書推進イベント等の開催

子どもが本の楽しさにふれる・知る機会として、北海道立図書館の「学校ブックフ

ェスティバル事業」やブックトーク事業は効果的である。

今後も北海道立図書館・余市図書館等との連携を図り、多様な本と出会う機会を増やしていきたい。

③ブックボランティア等による活動への支援

現在、小学校２校でブックボランティアによる読み聞かせが行われており、学校図書館の魅力的な環境づくりにも寄与してくれている。今後も学校での読書活動の充実にはブックボランティアは不可欠な存在であり、中学校での図書ボランティア活動や、ＰＴＡによる POP 作成等の図書館環境整備活動を含め、ボランティアに携わる方の要望や意見を把握し、教育委員会として支援の在り方を考えていきたい。

④朝読活動の推進

読書習慣の定着を目指す「朝読」活動は、各校で積極的に取り組まれている。今後も各学校と協力し、朝読活動を支援していきたい。

３　村図書コーナーにおける読書活動の推進

①新刊図書の購入と図書情報の提供

例年、話題図書・新刊図書等を購入するために、年４回に分けて書店を訪問している。新聞の書評やインターネットにより話題図書や魅力ある図書を把握するとともに、高校生を含めた若者向けの本にも目を向けるようにしている。

ここ５年間ほど取り組んできた、乳幼児向けを含めた児童図書の購入（購入費のおよそ一割）も継続していきたい。

村図書コーナーや健康支援センター図書コーナーでの新刊紹介、話題図書紹介を効果的に進めるとともに、読書週間のＰＲや各種文芸賞の情報提供も含め、村のホームページも利用しながら積極的な情報発信に努めていきたい。また、蔵書のデータ化を進め、利用者の利便性に努めていきたい。

このようなことに取り組みながら、一般村民を含めた読書活動の推進に努めたい。

②中学校、保育所等への図書貸出の推進

平成２６年度より継続している、村図書コーナー蔵書本からの中学校への図書一括貸出を、中学校の図書委員・図書担当教員と連携して進めたい。

また、保育士との交流を図り、健康支援センター図書コーナー蔵書本の保育所への貸出を検討していきたい。

③村図書コーナーの環境整備

村役場本庁舎１階玄関横ホールに村図書コーナーを移設して、７年が過ぎた。

利用者数・貸出冊数は微増傾向にあるが、２階に設置されていた時と比較すると利便性や貸出は飛躍的に伸びた。いかんせん限られたスペースと書架であることから、村民から図書室や図書コーナーの充実を求める声が出てきており、他の施設整備と併せ、今後の検討課題である。

4　関係機関との連携・協力による読書活動の推進

①ブックボランティアの育成・連携の強化

各学校のブックボランティア活動は定着し、年々活発になってきている。しかし、協力していただける方は固定化しているのが現状で、ブックボランティアの意義と必要性を知ってもらい、保護者や地域住民の方に積極的に参加していただく必要がある。そのために、学校と協力してボランティアの確保に努めるとともに、ブックボランティアとの交流や活動支援の強化に努めたい。

②北海道立図書館や余市図書館との連携

学校図書の不足解消や様々な本との出会いをねらいに、これまでもブックフェスティバル等のイベント開催に協力いただいてきた。今後も様々な読書活動を推進する上で、相談や情報交換等を積極的に行なうなど、連携強化に努めたい。

③学校図書館担当教員との連携

学校での読書活動を推進する上で、図書館運営や環境整備、ブックボランティアとの対応など図書館担当教員の果たす役割はとても大きい。このことから、担当教員との交流を密にし、有効な支援に努める必要がある。また、連携して「子ども読書の日」や「こどもの読書週間」の事業推進に努めたい。